

# 老年期における社会的活動、 友人関係と精神的健康との関連性に関する研究

橋 本 有 理 子\*

A Study on the Relationship with the Activities in the community  
and the relationship with Friend of the Elderly, and Mental Health

Yuriko Hashimoto

**要旨：**本稿の研究目的は、老年期における社会的活動、友人関係と精神的健康との関連性を分析し、高齢者のライフスタイルを検証することである。

本稿で得られた主な結論は、以下のとおりである。

第一に、高齢者と地域の社会資源との橋渡しの役割を持つ機関が必要である。また、男性高齢者の場合、活動の際に、「地域貢献」がキーワードである。

第二に、精神的健康に効果のある活動に参加する要素として、男性高齢者は、「主体性」や「頻度」が、女性高齢者は、「自分を高めること」が、高齢者全体では、「誰もが気軽に参加できること」があげられる。

第三に、家族内孤立の程度が高群の場合、友人の存在は、孤独感を低下させる要因となる。

第四に、友人間の物質的サポート、情緒的サポート、情報的サポートによる授受評価が精神的健康に影響を与える。また、家族内孤立の程度が高群の場合、友人への信頼関係は精神的健康を保持することに貢献している。

**Abstract :** The purpose of this paper was to analyze the relationship with the activities in the community and the relationship with friend of the elderly, and mental health. And the findings lead to future lifestyle of the elderly as an individual.

Major conclusions of this study were as follows :

First, it was important to create the role which linked the elderly to social resources in the community. And in the case of elderly men, their “contribution to community” was key-word to active in the community.

Second, “acting independently” and “frequency to active” in the case of elderly men, “enhancing potentiality of elderly women” in the case of them, and “the conditions which everybody can active without constraint” in the case of elderly contributed to participation in activities to have significant effect on their mental health.

Third, even if the degree of isolation in the family was at a high level, having friends of the elderly had a significant relationship with their loneliness.

Fourth, loneliness on the elderly had significant relationships with the degree of feeling of satisfaction caused by receiving the material supports, emotional supports and informational

---

\*関西福祉科学大学社会福祉学部 講師

supports from their friend. And self-esteem on the elderly had significant relationships with the degree of feeling of usefulness which was coming from their offering the material supports, emotional supports and informational supports to their friend. Finally, even if the degree of isolation in the family was at a high level, the confidence in friend had significant effect on their mental health.

**Key words** : 高齢者 the elderly 社会的活動 the activity in the community 友人 friend 精神的健康 mental health ライフスタイル lifestyle

## 1. 研究背景と研究目的

近年、少子高齢社会と呼ばれるようになってから久しくなりつつあるが、今日、その社会の先にはどのような問題が待ち構えているのかをさまざまな視点から活発に論じられるようになってきている。そして、その問題に対する打開策として、これもまたさまざまな提言がなされているところであるが、その一つに、定年退職後や末子の結婚後の人生のあり方があげられるといえる。すなわち、65歳時の平均余命が20年前後となっている現在、その長い期間は「余生」といった静的な観念ではなく、「新しい人生の幕開け」といった活気あふれる動的な観念が浸透するような社会が求められているといえる。そして、このような流れは、厚生労働白書（平成15年版）<sup>1)</sup>の中でも、これからの高齢社会を明るく活力のあるものとしていくためにも非常に重要であると述べられている。例えば、社会や地域の中で、高齢者が「世話を受ける」立場ではなく、希望に応じてむしろ社会や地域に積極的に貢献することを可能とすることが、超高齢社会が間近に迫りつつあるわが国にとって大切な視点であるといえる。

この視点については、厚生白書（平成12年版）においても、21世紀に向けて、「長年、知識・経験を培い、豊かな能力と意欲を持つ者」という新しい高齢者像を形成していくことが提唱されている。これは、政策の策定の視点も、客体としての受動的な高齢者から主体としての能動的な高齢者へ、と転換していることを示す

ものである<sup>2)</sup>。

第二次世界大戦前、家長及びその配偶者である高齢者は、「家」の後継者である子ども（主に長男）夫婦と同居生活をおくることが一般的である「老親扶養」という観点からも、子どもやその家族、親族によって扶養される立場であった。そして、戦後に入り、若い労働者は都市部へと流出し、核家族世帯の増加の契機となったが、その一方で、介護者の不在による高齢者の介護問題が表面化するなど、当時の高齢者は家族が高齢者をどのように援助するのか、あるいはそれが困難な場合には、行政としての救済的色合いも強かったといえ、高齢者は援助、扶養される立場、すなわち、「客体としての高齢者」という単一的な姿で世間では認識される傾向にあった。しかし、現在では、その様相も変わり、高齢者は、「家族関係をどのようにとらえ直すのか」「個としての自分らしい生き方とは何か」などを模索し、その目標や目的に向かって着実に歩む姿も見受けられるようになってきている。高齢者は、他者との相互援助の中で家族生活や自らの生活を営む立場、すなわち、「主体としての高齢者」という多様な姿が目されるようになり、この現状や動向について研究することはまさに意義深いことであるといえる。

これは、もちろん、家族内だけで起こりうる現象ではない。家族を取りまく「地域社会」という単位でも関係する事柄である。生きがいくりの観点から、生涯学習や社会参加の推進は、長期化した老年期の充実のためには不可欠

な課題となっている。また、平成13年12月に「高齢社会対策大綱」が閣議決定されたが、そのなかでも、「価値観が多様化する中で、学習を通じての心の豊かさや生きがいの充足の機会が求められ、経済社会の変化に対応して絶えず新たな知識や技術を習得する機会が必要とされることから、生涯のいつでも自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価される生涯学習社会の形成を目指す」こと、また、「高齢者が年齢にとらわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいをもって活躍できるよう、ボランティア活動をはじめとする高齢者の社会参加活動を促進するとともに、高齢者が自由時間を有効に活用し、充実して過ごせる条件の整備を図る」ことが述べられている<sup>3)</sup>。このように、高齢者は、地域社会においても、主体的な存在として求められる立場にあるといえる。そして、この立場を担うためには、地域で開催されるさまざまな学習活動や、地域貢献活動への参加がポイントになるといえる。というのも、高齢者は、学習活動や地域貢献活動に参加し、知識や経験、情報、他者との関わり合いが得られることを通して、自己の評価や価値、可能性を改めて再規定するだけでなく、家族や地域を新たな視点から見つめ直し、その問題点を提起した上で、改善案を生み出す力が備わることもある。そして、これがひいては、本稿の冒頭でも述べたように、超高齢社会への一途をたどるわが国にとって、社会活性化の原動力にもなりうるものといえる。

ここまでは、高齢者像や老年期における生活のあり方についてポジティブな要素で論じてきたが、現実に目を向けてみると、必ずしもそうではないこともある。高橋<sup>4)</sup>も述べているように、老年期における家族的課題として、夫婦の伴侶性についてふれているが、その際に、男性は「夫の家庭内自立化」を、女性は「妻の子どもからの情緒的自立化」を課題と位置づけている。両者に共通することは、それぞれの課題を

乗り越えなければ、自身の持つ意識や視点が家族内に埋没し、家族以外の領域に目を向けることが困難な点である。

これは、何を意味するのか。もし、家族間での情緒的な交流が円滑に行われず、家族内で孤立の状況下におかれた場合、高齢者は、家族に傾倒する程度が高いほど、その精神的健康に与える影響も大きいことは容易に想像のできることである。しかし、家族以外にも目を向けるゆとりを持ち、家族以外の他者、例えば友人の存在や関わり合いの意義、何らかの目的による活動の居場所、貢献できる機会があれば、家族内で受けた不安やさびしさの緩和化、心のすきまに対する補足、生きる意味や価値への再考などが得られる場合もある。すなわち、「階層性」という視点である<sup>5)</sup>。階層性とは、ある領域でうまくいかなければ、別の領域で精神的健康を保持することであり、老年期において、仕事や健康、家族など重要な対象を喪失する過程で関連性のある概念である。例えば、退職すれば、趣味活動に視点を移行させる、などがある。

以上のような論考をふまえて、本稿では、すべての集計・分析において、属性としての性別や世代別それぞれを統制するだけでなく、家族内孤立の程度別も属性とは別に統制した上で、まず第一に、学習活動およびグループ活動への参加状況を明らかにし、第二に、学習活動およびグループ活動に関する参加実績と自尊感情との関連性について明らかにしている。そして、第三に、友人の有無と孤独感との関係性を明らかにした上で、第四に、友人からのソーシャルサポート受領評価と孤独感との関連性と、友人へのソーシャルサポート提供評価と自尊感情との関連性についても明らかにしている。

## II. 方法

### 1. データ収集の手続きと調査対象者

データ収集は、近畿二府四県の60歳以上の男性、女性を対象として、以下の方法で行った。

表 1 調査対象者の属性

年 齢	世 帯 類 型			
60 歳～64 歳 208 (35.9%)	家 族 内 孤 立			
65 歳～69 歳 142 (24.4%)	高	低	その他	
70 歳～74 歳 121 (20.9%)				
75 歳以上 109 (18.8%)				
580	単独世帯	29 ( 5.9%)	17 (21.8%)	11
	夫婦のみの世帯	248 (50.5%)	38 (48.7%)	
	夫婦と同居子世帯	156 (31.8%)	13 ( 6.7%)	
	同居子との世帯	39 ( 7.9%)	5 ( 6.4%)	
	その他	19 ( 3.9%)	5 ( 6.4%)	
		491	78	11
	※その他の調査対象者は、家族が一人もいないため、その他で回答。			

本研究では、地域で行われている学習活動やグループ活動の有無を分析の一変数としてとらえており、参加も不参加も標本の中に含む必要があるために、データ収集方法として、調査会社の個人サンプルデータを活用し、無作為抽出法で 1000 名を抽出して、2006 年 5 月に郵送留置調査法で回収を行った。なお、無効票 23 票を除外し、580 票を分析対象とした（有効回答率 58.0%）。

調査対象者の性別は、男性が 265 名（45.7%）、女性が 315 名（54.3%）であった。なお、調査対象者の年齢、世帯類型については、表 1 のとおりである。

## 2. 変数の指標化

### (1) 自尊感情尺度

自尊感情尺度は、Rosenberg が作成し、山本らが翻訳した、計 10 項目から構成されている<sup>6)</sup>。

Rosenberg の自尊感情尺度は、本来、米国の高校生の自尊感情を測定するために開発されたものであるが、大和ら<sup>7)</sup>は、高齢者を対象に自尊感情尺度を実施してきた先行研究実績からみても、また実施方法の簡易さ、表現の簡潔さからみても、現段階では、Rosenberg の自尊感情尺度が高齢者の自尊感情を測定するには最も適していると評している。

自尊感情尺度の評価指標としては、各質問項

目に関して、「非常にあてはまる（5点）」から「全くあてはまらない（1点）」までの五件法による評定で求めており、その合計得点を自尊感情得点としている（Cronbach の  $\alpha$  係数は、男性では .84、女性では .82）。なお、自尊感情得点は、得点が高ければ高いほど、自尊感情が高くなるように設定している。

### (2) 孤独感尺度

孤独感尺度は、Russel, Peplau & Cutrona らが作成し、工藤・西川が翻訳した、計 20 項目から構成されている<sup>8)</sup>。

孤独感尺度の評価指標としては、各質問項目に関して、「よく感じる（4点）」から「決して感じない（1点）」までの四件法による評定で求めており、その合計得点を孤独感得点としている（Cronbach の  $\alpha$  係数は、男性では .88、女性では .87）。なお、孤独感得点は、得点が高ければ高いほど、孤独感が高くなるように設定している。

### (3) 家族内孤立

家族内孤立の程度とは、調査対象者とそれを取り巻く家族（配偶者、子ども、子どもの配偶者など）との関係の中で、調査対象者が家族内孤立を主観的に評価する程度のことである。評価指標としては、孤立の程度に対して、「非常に感じる」「少し感じる」「どちらともいえない」「あまり感じない」「全く感じない」という五件法による評定で求めている。なお、本稿で

は、「非常に感じる」「少し感じる」「どちらともいえない」と回答した者を高群とし、「あまり感じない」「全く感じない」と回答した者を低群としている。

#### (4) 学習活動およびグループ活動

内閣府による「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(平成15年)<sup>9)</sup>の中で、高齢者の学習活動およびグループ活動への参加状況を調査する際に用いられている項目を参考に質問項目を設定している。

いずれの活動も、最近3か月間で、各活動項目の参加実績の有無について質問しているが、参加実績の有る項目には全て回答してもらう複数回答を行い、統計上では、参加実績の無い場合を「0」、有る場合を「1」と設定している。なお、「参加していない」項目については、各活動項目一つでも参加している場合を「0」、全く参加していない場合を「1」と設定している。

#### (5) ソーシャルサポート授受評価

ソーシャルサポート授受評価は、野口<sup>10)</sup>が作成した「手段的サポート」「情緒的サポート」や、河合・下仲<sup>11)</sup>が作成した「生活的サポート」「物質的サポート」「情緒的サポート」を参考に作成されている。さらに、拙著<sup>12)</sup>では、年齢を重ねるごとに、心身共に不安を感じる高齢者にとって、安定した生活をおくる上で欠かすことのできない「情報」の重要性について論じているが、本項目では、その理由からも「情報的サポート」を新たに加えている。

本項目におけるサポートの内容は、友人との間における生活的サポート、物質的サポート、情緒的サポート、情報的サポートによる4種類計8項目から構成されている。

ソーシャルサポート授受評価各項目の評価指標としては、最近3か月間で、各ソーシャルサポートの授受実績がある場合に限り、友人との各ソーシャルサポートの受領もしくは提供実績に対して「非常に満足している(5点)」から「全く満足していない(1点)」までの五件法に

よる評定で求めている。なお、ソーシャルサポート授受評価各項目の得点は、得点が高ければ高いほど、ソーシャルサポートに関する満足感もしくは有用感を感じるように設定している。

### 3. 分析枠組

性別や世代別、家族内孤立の程度別を統制した上で、まず、一つ目の分析モデルとしては、学習活動およびグループ活動への参加状況をふまえた上で、調査対象者の学習活動およびグループ活動に関する参加実績を説明変数とし、調査対象者の自尊感情を被説明変数とするモデルを設定している。次に、二つ目の分析モデルとしては、調査対象者の友人の有無を説明変数とし、調査対象者の孤独感を被説明変数とするモデルを設定している。そして、三つ目の分析モデルとしては、友人からのソーシャルサポート受領評価を説明変数とし、調査対象者の孤独感を被説明変数とするモデルと、友人へのソーシャルサポート提供評価を説明変数とし、調査対象者の自尊感情を被説明変数とするモデルを設定している。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 性別にみる学習活動およびグループ活動に関する参加状況

表2は、性別で、学習活動に関する参加状況を示しているが、参加項目の中では、男性、女性共に、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」が共に高く、男性では28名(10.7%)、女性では72名(23.8%)という結果であった。次いで、男性、女性共に、「公的機関が高齢者専用で設けている高齢者学級や教養講座」が続いている。それ以降、男性では、「公的機関や大学などが開催する一般市民向けの公開講座」が、女性では、「その他」となっている。

なお、「参加していない」と回答した者は、男性では196名(75.1%)、女性では183名(60.4%)と、男性と女性との間に開きが認め

表 2 学習活動に関する参加状況 (性別) (複数回答)  
(%) 内の数値は各項目への参加率もしくは不参加率

順位	男 性		女 性	
①	カルチャーセンターなどの民間団体が 行う学習活動	28(10.7%)	カルチャーセンターなどの民間団体が 行う学習活動	72(23.8%)
②	公的機関が高齢者専用に行っている高 齢者学級や教養講座	24( 9.2%)	公的機関が高齢者専用に行っている高 齢者学級や教養講座	40(13.2%)
③	公的機関や大学などが開催する一般市 民向けの公開講座	22( 8.4%)	その他	23( 7.6%)
④	その他	10( 3.8%)	公的機関や大学などが開催する一般市 民向けの公開講座	21( 6.9%)
⑤	通信手段を用いて自宅にいながらでき る学習	7( 2.7%)	通信手段を用いて自宅にいながらでき る学習	14( 4.6%)
⑥	各種専門学校、大学や大学院への進学	0	各種専門学校、大学や大学院への進学	1( 0.3%)
	参加していない	196(75.1%)	参加していない	183(60.4%)

表 3 性別間における学習活動不参加状況の比較 (t-test)

	N	Mean	SD	T 値
男性	261	.75	.43	3.78***
女性	303	.60	.49	

両側検定

\*\*\*p<.001

られるが、かなりの高い割合で最近の3か月間  
は不参加と答えていた。

さらに、表3では、性別間で、学習活動不参加  
状況を比較しているが、t検定の結果、男性、  
女性間で学習活動不参加状況に関する有意差  
が認められ、男性の方が女性よりも学習活動  
不参加の割合が高いといえる。

カルチャーセンターなどの活動に関する参加  
割合の高い理由としては、身近な場所での開催  
や、活動メニューの充実、参加費用に対する選  
択の余地、活動期間・曜日・時間の柔軟性があ  
げられる。高齢者と一口にいっても、家族の有  
無や、その置かれている状況、学習活動以外で  
の社会活動状況、経済状況、健康状態、学習活  
動に対する動機内容や意欲の程度など、高齢者  
それぞれの立場は異なり、このような状況下で  
は、前述した理由などにより、カルチャーセン

ターなどで行われる活動に対する参加割合が他  
の活動項目に比べて高いものと推論できる。

なお、性別間では、男性の方が女性よりも学  
習活動の不参加割合が高い結果になっている  
が、男性は女性に比べると、職業生活を継続し  
ている割合が高いことや、職業生活を終了した  
後、新しい生活のあり方として学習活動に参加  
することへの意識が高揚しなかったり、そのき  
っかけをつかむことが難しい場合もある。男性  
にとっては、職業生活終了後に待ち構えている  
新しい生活をどのように過ごすのかは、これまで  
の生活の大半を仕事に従事すればするほど大き  
な課題であり、いろいろな思いを巡らせること  
はあっても、新しい生活に向けて行動に移す  
ことが難しいのではないかといえる。したがっ  
て、地域に存在するさまざまな社会資源との橋  
渡しの役割の存在が今後も引き続き積極的に展  
開されることと、たとえ存在そのものがあつ  
ても地域住民一人ひとりにその情報が行き渡  
るようなシステムの構築や、情報が行き渡った  
後には、相談曜日・時間の柔軟性や、ホーム  
ページや広告でのデザインやキャッチコピー、  
メッセージの工夫など相談しやすい体制、環  
境づくり、意欲向上への仕掛けが求められて  
くるとい

表4 グループ活動に関する参加状況（性別）（複数回答）  
（％）内の数値は各項目への参加率もしくは不参加率

順位	男	性	女	性
①	健康やスポーツに関するグループ活動	55(21.5%)	健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動	78(25.7%)
②	地域行事に関するグループ活動（主にお祭りなどのイベント活動）	47(18.4%)	健康やスポーツに関するグループ活動	63(20.7%)
③	生活環境改善に関するグループ活動（主に清掃などの活動）	38(14.8%)	高齢者への支援に関するグループ活動	41(13.5%)
④	安全管理に関するグループ活動（主に地域の防犯・防災に関する活動）	33(12.9%)	地域行事に関するグループ活動（主にお祭りなどのイベント活動）	40(13.2%)
⑤	健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動	32(12.5%)	生活環境改善に関するグループ活動（主に清掃などの活動）	40(13.2%)
⑥	高齢者への支援に関するグループ活動	17( 6.6%)	安全管理に関するグループ活動（主に地域の防犯・防災に関する活動）	16( 5.3%)
⑦	その他	14( 5.5%)	子育て支援に関するグループ活動	11( 3.6%)
⑧	子育て支援に関するグループ活動	9( 3.5%)	その他	10( 3.3%)
	参加していない	133(52.0%)	参加していない	148(48.7%)

える。

表4は、性別で、グループ活動に関する参加状況を示しているが、参加項目の中では、男性は、「健康やスポーツに関するグループ活動」が55名（21.5%）と最も高く、次いで、「地域行事に関するグループ活動」「生活環境改善に関するグループ活動」「安全管理に関するグループ活動」が続いている。一方、女性では、「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」が78名（25.7%）と最も高く、次いで、「健康やスポーツに関するグループ活動」「高齢者への支援に関するグループ活動」「地域行事に関するグループ活動」「生活環境改善に関するグループ活動」が続いている。

なお、「参加していない」と回答した者は、男性では133名（52.0%）、女性では148名（48.7%）と半数前後の者が最近の3か月間は不参加と答えていた。さらに、性別間でのグループ活動不参加状況を比較したが、t検定の結果、有意差は認められなかった。

表5 性別間におけるグループ活動参加状況の比較（t-test）

	N	Mean	SD	T 値
	健康やスポーツ以外の趣味			
男性	256	.13	.33	-4.04***
女性	304	.26	.44	
	地域行事			
男性	256	.18	.39	1.67†
女性	304	.13	.44	
	安全管理			
男性	256	.13	.34	3.10**
女性	304	.05	.22	
	高齢者への支援			
男性	256	.07	.25	-2.73**
女性	304	.13	.34	

両側検定 †p<.10, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

性別間では、各活動項目の順位に差異が認められたため、表5では、性別間で、各活動項目の参加状況を比較しているが、t検定の結果、男性は、「安全管理に関するグループ活動」の

参加割合が有意に高く、「地域行事に関するグループ活動」の参加割合は有意に高い傾向であった。一方、女性は、「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」「高齢者への支援に関するグループ活動」の参加割合が有意に高い結果であった。

男性は、単純集計結果やt検定結果からも、グループ活動への参加に対する動機が高まる要因の一つに、「地域貢献」というキーワードがあげられるのではないかと見える。男性は、健康・スポーツなどにも高い関心を示すものと思われるが、女性に比べると、地域行事や安全管理に関するグループ活動の参加割合が高く、また、生活環境改善に関するグループ活動も比較的高い順位に位置している。自己への投資だけでなく、何らかの活動を通して、それが地域にどのような形で貢献できるのかといった目的志向性が色濃く表現される活動に従事する傾向があるものと考察できる。これは、これまでの職業生活の中で培われてきた職業人としての理念に通ずるものであるといえる。一方、女性は、「地域貢献」という視点からいえば、高齢者への支援活動が男性に比べると、参加割合が高い結果になっている。女性は家事経験や介護経験などを持つ機会が男性に比べると多く、また、

高齢者への支援内容が平日や日中の活動、定期的な訪問、親密なコミュニケーションなど、女性の方が活躍しやすい領域であることも、女性の参加割合が高い結果を後押ししていると推論できる。

2. 世代別にみる学習活動およびグループ活動に関する参加状況

表6は、世代別で、学習活動に関する参加状況を示しているが、参加項目の中では、両世代共に、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」が共に高く、60歳代では62名(18.0%)、70歳以上では38名(17.4%)という結果であった。次いで、両世代共に、「公的機関が高齢者専用で設けている高齢者学級や教養講座」、「公的機関や大学などが開催する一般市民向けの公開講座」が続いている。

なお、「参加していない」と回答した者は、60歳代では241名(69.9%)、70歳以上では138名(63.0%)と、両世代共に、6~7割程度が最近の3か月間は不参加と答えていた。さらに、世代間で、学習活動不参加状況を比較したが、t検定の結果、有意差は認められなかった。

表7は、世代別で、グループ活動に関する参加状況を示しているが、参加項目の中では、60

表6 学習活動に関する参加状況(世代別)(複数回答)  
(%)内の数値は各項目への参加率もしくは不参加率

	60 歳 代		70 歳 以 上	
①	カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動	62(18.0%)	カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動	38(17.4%)
②	公的機関が高齢者専用で設けている高齢者学級や教養講座	29( 8.4%)	公的機関が高齢者専用で設けている高齢者学級や教養講座	35(16.0%)
③	公的機関や大学などが開催する一般市民向けの公開講座	23( 6.7%)	公的機関や大学などが開催する一般市民向けの公開講座	20( 9.1%)
④	その他	20( 5.8%)	その他	13( 5.9%)
⑤	通信手段を用いて自宅にいながらできる学習	10( 2.9%)	通信手段を用いて自宅にいながらできる学習	11( 5.0%)
⑥	各種専門学校、大学や大学院への進学	1( 0.3%)	各種専門学校、大学や大学院への進学	0
	参加していない	241(69.9%)	参加していない	138(63.0%)



表7 グループ活動に関する参加状況（世代別）（複数回答）  
（％）内の数値は各項目への参加率もしくは不参加率

60 歳 代		70 歳 以 上		
①	健康やスポーツに関するグループ活動	79(23.1%)	健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動	40(18.3%)
②	健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動	70(20.5%)	健康やスポーツに関するグループ活動	39(17.9%)
③	地域行事に関するグループ活動（主にお祭りなどのイベント活動）	57(16.7%)	生活環境改善に関するグループ活動（主に清掃などの活動）	36(16.5%)
④	生活環境改善に関するグループ活動（主に清掃などの活動）	42(12.3%)	地域行事に関するグループ活動（主にお祭りなどのイベント活動）	30(13.8%)
⑤	高齢者への支援に関するグループ活動	39(11.4%)	安全管理に関するグループ活動（主に地域の防犯・防災に関する活動）	19( 8.7%)
⑥	安全管理に関するグループ活動（主に地域の防犯・防災に関する活動）	30( 8.8%)	高齢者への支援に関するグループ活動	19( 8.7%)
⑦	子育て支援に関するグループ活動	12( 3.5%)	その他	11( 3.6%)
⑧	その他	11( 5.2%)	子育て支援に関するグループ活動	10( 3.3%)
	参加していない	167(48.8%)	参加していない	114(52.3%)

歳代では、「健康やスポーツに関するグループ活動」が79名（23.1%）と最も高く、次いで、「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」「地域行事に関するグループ活動」「生活環境改善に関するグループ活動」「高齢者への支援に関するグループ活動」が続いている。一方、70歳以上では、「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」が40名（18.3%）と最も高く、次いで、「健康やスポーツに関するグループ活動」「生活環境改善に関するグループ活動」「地域行事に関するグループ活動」が続いている。

なお、「参加していない」と回答した者は、60歳代では167名（48.8%）、70歳以上では114名（52.3%）と半数前後が最近の3か月間は不参加と答えていた。さらに、世代間でグループ活動不参加状況を比較したが、t検定の結果、有意差は認められなかった。

世代別で比較しているが、単純集計結果やt検定結果からも、内容の差異や有意差は認められない結果になっている。年齢を重ねると

に、健康状態が悪化する危険性は高まるものの、高齢者一人ひとりの置かれている立場や状況が異なるため、「お年寄りはいこうあるべきである」「お年寄りだからこれはさせない方がよい」というようなエイジズム思想や、単純に生理的年齢でその人を判断するのではなく、個別の事情や状況に応じた関わり方や援助のあり方が身近な存在である家族や地域住民、福祉専門職にも求められてくるものといえる。

### 3. 家族内孤立の程度別にみる学習活動およびグループ活動に関する参加状況

表8は、家族内孤立の高群と低群で、学習活動に関する参加状況を示しているが、参加項目の中では、家族内孤立の程度が両群共に、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」が高く、家族内孤立の程度が高群の場合、19名（25.3%）、低群の場合、80名（16.7%）という結果であった。次いで、家族内孤立の程度が両群共に、「公的機関が高齢者専用で設けている高齢者学級や教養講座」が続いている。

表 8 学習活動に関する参加状況 (家族内孤立の程度別) (複数回答)  
((%) 内の数値は各項目への参加率もしくは不参加率)

	家族内孤立 高群	家族内孤立 低群
①	カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動 19(25.3%)	カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動 80(16.7%)
②	公的機関が高齢者専用に行っている高齢者学級や教養講座 11(14.7%)	公的機関が高齢者専用に行っている高齢者学級や教養講座 53(11.1%)
③	公的機関や大学などが開催する一般市民向けの公開講座 7( 9.3%)	公的機関や大学などが開催する一般市民向けの公開講座 35( 7.3%)
④	その他 7( 9.3%)	その他 22( 4.6%)
⑤	通信手段を用いて自宅にいながらできる学習 3( 4.0%)	通信手段を用いて自宅にいながらできる学習 15( 3.1%)
⑥	各種専門学校、大学や大学院への進学 1( 1.2%)	各種専門学校、大学や大学院への進学 0
	参加していない 47(62.7%)	参加していない 329(68.7%)

表 9 グループ活動に関する参加状況 (家族内孤立の程度別) (複数回答)  
((%) 内の数値は各項目への参加率もしくは不参加率)

	家族内孤立 高群	家族内孤立 低群
①	健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動 17(22.7%)	健康やスポーツに関するグループ活動 104(21.9%)
②	健康やスポーツに関するグループ活動 12(16.0%)	健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動 91(19.2%)
③	高齢者への支援に関するグループ活動 9(12.0%)	地域行事に関するグループ活動 (主に お祭りなどのイベント活動) 80(16.9%)
④	地域行事に関するグループ活動 (主に お祭りなどのイベント活動) 7( 9.3%)	生活環境改善に関するグループ活動 (主に清掃などの活動) 72(15.2%)
⑤	生活環境改善に関するグループ活動 (主に清掃などの活動) 4( 5.3%)	高齢者への支援に関するグループ活動 48(10.1%)
⑥	子育て支援に関するグループ活動 3( 4.0%)	安全管理に関するグループ活動 (主に 地域の防犯・防災に関する活動) 47( 9.9%)
⑦	その他 3( 4.0%)	その他 21( 4.4%)
⑧	安全管理に関するグループ活動 (主に 地域の防犯・防災に関する活動) 1( 1.3%)	子育て支援に関するグループ活動 16( 3.4%)
	参加していない 43(57.3%)	参加していない 230(48.5%)

なお、「参加していない」と回答した者は、家族内孤立の程度が高群の場合、47名(62.7%)、低群の場合、329名(68.7%)と、家族内孤立の程度が両群共に、6~7割程度が最近の3か月間は不参加と答えていた。さらに、家族内

孤立の両群間で学習活動不参加状況を比較したが、t検定の結果、有意差は認められなかった。

表 9 は、家族内孤立の高群と低群で、グループ活動に関する参加状況を示しているが、参加

項目の中では、家族内孤立の程度が高群の場合、「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」が17名(22.7%)と最も高く、次いで、「健康やスポーツに関するグループ活動」「高齢者への支援に関するグループ活動」が続いている。一方、家族内孤立の程度が低群の場合、「健康やスポーツに関するグループ活動」が104名(21.9%)と最も高く、次いで、「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」「地域行事に関するグループ活動」「生活環境改善に関するグループ活動」「高齢者への支援に関するグループ活動」が続いている。

なお、「参加していない」と回答した者は、家族内孤立の程度が高群の場合、43名(57.3%)、低群の場合、230名(48.5%)と半数前後が最近の3か月間は不参加と答えていた。さらに、家族内孤立の両群間でグループ活動不参加状況を比較したが、t検定の結果、有意差は認められなかった。

家族内孤立の高群と低群間で、学習活動においては差異が認められなかったが、グループ活動では、家族内孤立の低群の場合、健康やスポーツ、趣味に続いて、地域行事や生活環境改善、高齢者への支援などの地域貢献活動も参加割合が1割を超える結果になっている。一方、高群の場合、1割を超える地域貢献活動は高齢者への支援のみにとどまっている。さらに、t検定結果から有意差は認められなかったが、不参加の割合は、家族内孤立の高群の方が低群よ

りも約10ポイントの割合で高いといえ、家族内孤立の高群の高齢者は低群の高齢者よりも地域との接点が少ないといえる。

#### 4. 性別にみる学習活動およびグループ活動実績と自尊感情との関連性

表10は、性別にみる学習活動と自尊感情との関連性を示しているが、男性では、各学習活動と自尊感情との間に有意な関連性は認められなかった。一方、女性では、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」、「通信手段を用いて自宅にいながらできる学習」と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。また、学習活動不参加と自尊感情との間に有意な負の相関が認められた。

さらに、表10は、性別にみるグループ活動実績と自尊感情との関連性も示しているが、男性では、「健康やスポーツに関するグループ活動」、「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。また、グループ活動不参加と自尊感情との間に有意な負の相関が認められた。一方、女性では、各グループ活動と自尊感情との間に有意な関連性は認められなかった。

男性は、グループ活動、特に健康やスポーツ、趣味に関する活動が精神的健康を高めているといえる。グループ活動の中でも精神的健康と関連性のなかった他の活動項目は地域に貢献する項目であるにもかかわらず、なぜ、今回の

表10 学習活動およびグループ活動実績と自尊感情との関連性(性別)  
(Pearson Correlation)

	男 性	女 性
学習活動		
カルチャーセンターでの学習		.240*** (N=303)
通信手段を用いて自宅学習		.115*
不参加		-.182**
グループ活動		
健康やスポーツ	.124* (N=251)	
健康やスポーツ以外の趣味	.140*	
不参加	-.174**	

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

ような結果になったのか。なお、高野<sup>13)</sup>は、生きがいを感じている高齢者は、社会組織の中でも、町内会や自治会、婦人会などといった居住を契機として自動加入となる組織だけではなく、趣味の同好会やスポーツ団体などといった自発的加入による組織に参加している傾向が認められた、と述べている。しかし、今回の研究結果からは、高野の知見との間に若干差異が認められたといえる。

そのポイントとして、「主体性」と「頻度」という観点から述べる。地域貢献に関する活動は、自ら望んで活動に従事する者もいるが、地域内での当番制や地域の和の大切さなどを理由に従事する者もいる。また、地域貢献に関する活動は、頻繁に行われる活動から年に 1、2 回程度の活動もある。そのため、主体性の程度や参加の頻度に幅がある。その一方で、健康やスポーツ、趣味は主体的に参加することが多く、参加する頻度も比較的高いことから、そのグループの中での役割も定着し、自分の置かれている立場を自覚しやすいため、自己の評価や価値が低下する可能性は低いものと推論できる。したがって、男性は、グループ活動で参加実績がなければ、自身の無用感や存在価値の揺らぎを感じるものといえ、自尊心の低下につながるものといえる。

一方、女性は、男性に比べると、学習活動を通して、「自分を磨く」「自分に投資する」「自分らしい生き方とは何か」などに着目すること

が精神的健康につながるといえ、学習活動実績がなければ、自己の評価や価値が低下するものと考察できる。

### 5. 世代別にみる学習活動およびグループ活動実績と自尊心との関連性

表 11 は、世代別にみる学習活動実績と自尊心との関連性を示しているが、60 歳代では、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」と自尊心との間に有意な正の相関が認められた。また、学習活動不参加と自尊心との間に有意な負の相関が認められた。一方、70 歳以上では、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」と自尊心との間に有意な正の相関が認められた。

さらに、表 11 は、世代別にみるグループ活動実績と自尊心との関連性も示しているが、60 歳代では、「健康やスポーツに関するグループ活動」「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」と自尊心との間に有意な正の相関が認められた。また、グループ活動不参加と自尊心との間に有意な負の相関が認められた。一方、70 歳以上では、各グループ活動と自尊心との間に有意な関連性は認められなかった。

学習活動では、両世代共に、参加割合の最も高い活動項目と自尊心との間に関連性が認められたが、このことから、誰もが気軽に参加できる社会資源を積極的に生み出すことが高齢

表 11 学習活動およびグループ活動実績と自尊心との関連性 (世代別)  
(Pearson Correlation)

	60 歳代	70 歳以上
学習活動		
カルチャーセンターでの学習	.121* (N=342)	.206*** (N=216)
不参加	-.142**	
グループ活動		
健康やスポーツ	.136* (N=340)	
健康やスポーツ以外の趣味	.126*	
不参加	-.107*	

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

者一人ひとりの精神的健康を高めることになると考察できる。

## 6. 家族内孤立の程度別にみる学習活動およびグループ活動実績と自尊感情との関連性

表12は、家族内孤立の高群と低群にみる、学習活動実績と自尊感情との関連性を示しているが、家族内孤立の程度が高群の場合、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」、「公的機関や大学などが開催する一般市民向けの公開講座」と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。また、学習活動不参加と自尊感情との間に有意な負の相関が認められた。一方、家族内孤立の程度が低群の場合、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」、「通信手段を用いて自宅にいながらできる学習」と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。また、学習活動不参加と自尊感情との間に有意な負の相関が認められた。

さらに、表12は、家族内孤立の高群と低群にみる、グループ活動実績と自尊感情との関連性も示しているが、家族内孤立の程度が高群の場合、「子育て支援に関するグループ活動」と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。一方、家族内孤立の程度が低群の場合、「健康やスポーツに関するグループ活動」「健康やスポーツ以外の趣味に関するグループ活動」と自尊感情との間に有意な正の相関が認められ

た。

竹中<sup>14)</sup>は、「孤立の状況におかれようと、精神的に健康な人は、常に周囲の状況や出来事に関心を持ち、自分にとっての意味を考えている。(中略)精神的な健康をはかる尺度として、社会への関心は大きな意味があるはずである」と述べているが、今回の結果はこの知見を裏づけているものといえる。すなわち、家族内において同じような孤立の状況下でも、学習活動の参加如何によっては、自尊感情に差異が認められ、学習活動に参加実績が無い者は、有る者よりも自尊感情が低いといえる。したがって、家族内における自らの立場や役割が満足できる状況ではなくても、家族以外での心の拠り所が存在すれば、自身の自尊心を保持できるものと考察できる。

## 7. 友人の有無が調査対象者の孤独感に与える影響

表13は、性別、世代別、家族内孤立の程度別で、友人の有無が孤独感に与える影響を示しているが、すべてにおいて、友人の有無が孤独感に影響を与える結果になっている。すなわち、友人の存在は、孤独感を低下するものといえる。

ここで注目すべき点は、家族内孤立の程度が高い場合でも、友人の存在の有無が自身の孤独感に影響を与える結果になっていることであ

表12 学習活動およびグループ活動実績と自尊感情との関連性  
(家族内孤立の程度別) (Pearson Correlation)

	高 群	低 群
学習活動		
カルチャーセンターでの学習	.297* (N=73)	.138** (N=476)
一般市民向けの公開講座	.286*	
通信手段を用いて自宅学習		.100*
不参加	-.320**	-.114*
グループ活動		
健康やスポーツ		.124** (N=472)
健康やスポーツ以外の趣味		.100*
子育て支援	.248* (N=73)	

\*p<.05, \*\*p<.01

**表 13** 性別、世代別、家族内孤立の程度別による友人の有無間の孤独感の比較

(t-test)

		N	Mean	SD	T 値
男性	友人 有	185	46.45	8.37	6.27***
	友人 無	66	54.14	9.02	
女性	友人 有	259	44.56	8.33	6.84***
	友人 無	43	54.12	9.40	
60 歳代	友人 有	275	44.96	8.50	7.74***
	友人 無	69	54.03	9.52	
70 歳以上	友人 有	169	45.99	8.19	5.72***
	友人 無	40	54.30	8.53	
高群	友人 有	57	51.40	8.94	4.41***
	友人 無	19	61.42	7.39	
低群	友人 有	378	44.37	7.85	8.73***
	友人 無	90	52.59	8.74	

両側検定

\*\*\*p<.001

る。友人が存在するという事は、たとえ、家族内におけるさびしさや不安、やり場のない思いを持ち合わせていたとしても、家族以外の領域で喜ぶことがあれば互いに喜び合い、不安があれば寄り添い合える機会がもたらされることを意味している。したがって、家族以外でも、友人や学習活動、地域貢献活動など重層的な人的・物的ネットワークを自身の周囲に構築しておくことは、精神的健康を保持する上で重要な作業である。

**8. 友人からのソーシャルサポートの受領評価と孤独感との関連性**

表 14、表 15、表 16 は、性別、世代別、家族内孤立の程度別で、友人からのソーシャルサポートの受領評価と孤独感との関連性を示しているが、すべてにおいて、友人からの物質的サポートのうち「物をもらう」サポートと、情緒的

**表 14** 友人からのソーシャルサポートの受領評価と孤独感との関連性 (性別)

(Pearson Correlation)

	男 性	女 性
物質的サポート 物をもらう	-.194* (N=105)	-.271** (N=161)
情緒的サポート 話し相手になってもらう 相談にのってもらう	-.281** (N=122) -.224* (N=113)	-.293*** (N=191) -.296*** (N=175)
情報的サポート 個人に必要な情報を提供してもらう 一般的に必要な情報を提供してもらう	-.338*** (N=122) -.375*** (N=123)	-.366*** (N=185) -.333*** (N=178)

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

**表 15** 友人からのソーシャルサポートの受領評価と孤独感との関連性 (世代別)

(Pearson Correlation)

	60 歳代	70 歳以上
物質的サポート 物をもらう	-.291*** (N=163)	-.229* (N=103)
情緒的サポート 話し相手になってもらう 相談にのってもらう	-.323*** (N=202) -.317*** (N=189)	-.263** (N=111) -.214* (N=99)
情報的サポート 個人に必要な情報を提供してもらう 一般的に必要な情報を提供してもらう	-.315*** (N=197) -.316*** (N=190)	-.424*** (N=110) -.436*** (N=111)

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表 16 友人からのソーシャルサポートの受領評価と孤独感との関連性  
(家族内孤立の程度別) (Pearson Correlation)

	高 群	低 群
物質的サポート		
物をもらう	-.422* (N=34)	-.231*** (N=227)
情緒的サポート		
話し相手になってもらう	-.344* (N=37)	-.280*** (N=271)
相談にのってもらう	-.436** (N=35)	-.245*** (N=248)
情動的サポート		
個人に必要な情報を提供してもらう	-.400** (N=42)	-.319*** (N=259)
一般的に必要な情報を提供してもらう	-.483** (N=36)	-.349*** (N=260)

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

サポート、情動的サポートの受領評価と孤独感との間に有意な負の相関が認められた。

普段、日常生活を送る上で健康状態や経済状況にそれほど不自由さを感じなければ、マズローの欲求階層説では、次に求めるものとして、他者からの愛情や承認、評価、そして、最終的には自分の能力や可能性の発揮という構造になっている。したがって、「物をもらう」行為そのものに満足するという事は、例えば、重要な他者から自分が大切にされているという実感や、非常に思い深い物をもらった時の喜びなどが孤独感を低下するものと考察できる。また、情緒的サポートや情動的サポートの受領に満足することは、日常生活を送る上で、さまざまな悩みや不安、恐怖、不便などに真剣に向き合ってくれる相手や適切な情報を提供してくれる心強い味方が存在していることを意味している。したがって、「私は決して一人ではない」という力強さが生まれ、孤独感を低下するものと考えられる。金子が提言している「生きがい 10 か条」<sup>15)</sup>の中には、「安心感を何かで得ること(家族、近隣、友人、緊急通報システム協力員)」があげられているが、何かあった場合に親身になって世話をしてくれたり、駆けつけてくれる他者の存在は、不安も和らぎ、生きる喜びにもつながるものといえる。

## 9. 友人へのソーシャルサポートの提供評価と自尊感情との関連性

表 17、表 18、表 19 は、性別、世代別、家族内孤立の程度別で、友人へのソーシャルサポートの提供評価と自尊感情との関連性を示しているが、男性、女性共に、友人への物質的サポートのうち「物をあげる」サポートと、情緒的サポート、情動的サポートの提供評価と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。また、世代別では、60 歳代は、友人への物質的サポートのうち「物をあげる」サポートと、情緒的サポート、情動的サポートの提供評価と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。一方、70 歳以上は、友人への物質的サポートのうち「物をあげる」サポートと、情緒的サポートのうち「悩みごとがあった時、相談にのってあげる」サポート、情動的サポートの提供評価と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。さらに、家族内孤立の高群と低群の比較では、家族内孤立の高群の場合、友人への物質的サポートのうち「物をあげる」サポートと、情緒的サポートのうち「悩みごとがあった時、相談にのってあげる」サポート、情動的サポートの提供評価と自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。一方、家族内孤立の低群の場合、情緒的サポート、情動的サポートと自尊感情との間に有意な正の相関が認められた。

「物をあげる」という行為そのものに満足することは、物を提供する重要な他者の存在や、

表 17 友人へのソーシャルサポートの提供評価と自尊感情との関連性 (性別)  
(Pearson Correlation)

	男 性	女 性
物質的サポート		
物をあげる	.207* (N=105)	.188** (N=161)
情緒的サポート		
話し相手になってあげる	.247** (N=130)	.160* (N=199)
相談にのってあげる	.278** (N=117)	.196** (N=196)
情報のサポート		
個人に必要な情報を提供してあげる	.378*** (N=120)	.292*** (N=185)
一般的に必要な情報を提供してあげる	.371*** (N=123)	.249** (N=182)

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表 18 友人へのソーシャルサポートの提供評価と自尊感情との関連性 (世代別)  
(Pearson Correlation)

	60 歳代	70 歳以上
物質的サポート		
物をあげる	.170* (N=167)	.211* (N= 99)
情緒的サポート		
話し相手になってあげる	.205** (N=204)	
相談にのってあげる	.200** (N=198)	.241** (N=115)
情報のサポート		
個人に必要な情報を提供してあげる	.366*** (N=187)	.257** (N=118)
一般的に必要な情報を提供してあげる	.298*** (N=188)	.282** (N=117)

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表 19 友人へのソーシャルサポートの提供評価と自尊感情との関連性  
(家族内孤立の程度別) (Pearson Correlation)

	高 群	低 群
物質的サポート		
物をあげる	.459** (N=38)	
情緒的サポート		
話し相手になってあげる		.156** (N=281)
相談にのってあげる	.387** (N=44)	.170** (N=262)
情報のサポート		
個人に必要な情報を提供してあげる	.640*** (N=41)	.251*** (N=258)
一般的に必要な情報を提供してあげる	.532** (N=38)	.251*** (N=261)

\*\*p<.01, \*\*\*p<.001

他者がその行為を喜んでくれる事実、受領の立場になる可能性の高い年代に差し掛かるからこそ、提供の立場に立てる意義などが自己の評価や価値を高め、自尊感情の低下を防ぐものになると考察できる。これは、情緒的サポートや情報のサポートでも同じことがいえる。藤崎<sup>16)</sup>も、他者との深い情緒的かかわりは、その種の

感情の存在それ自体が自己の存在意義の確認につながる、と述べており、さらに、具体的な活動を通して他者やより大きな全体社会に何らかの貢献をなしていると思えることが、自己の有る感の源泉となる、とも論じている。

一方、たとえば、家族内での孤立の程度が高く、消極的な意識や姿勢を持ちやすくなったと



しても、友人に対する各種ソーシャルサポートの提供評価が高まれば、自ずと、「私は大切な人から必要とされている」「私は役に立っている」「私はもっとこのようになりたい」という前向きな自己像や新しい自己像が規定され、その維持や実現に向けて、明日以降の生きる活力にもつながるものといえる。

なお、高齢者のソーシャルサポートを語る上で、「役割逆転」という概念が登場する。これは、老年期のある時点で、親子間におけるソーシャルサポートの提供と受領の割合が逆転することを意味している。ところで、拙著<sup>17)</sup>では、親子関係と友人関係の成立に関する差異について述べているが、友人関係は、親子関係と異なり、相互の自発性に基づく自由選択によって結合した選択的な関係であり、友人との関係的地位は対等であることを原則としている。したがって、親子間で役割逆転が生じ、被援助者の立場に立つようなことがあっても、友人に対する各種ソーシャルサポートの提供評価が高まれば、援助者の立場に立つ機会も増え、高齢者の自尊感情のゆらぎも安定するものと推論できる。

#### IV. 結論と今後の課題

本研究結果から、第一の結論として、学習活動の参加状況では、男性、女性共に、「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」が高い参加割合を示しているが、男性の方が女性よりも学習活動の不参加割合が高い結果になっている。男性にとっては、職業生活<sup>すべて</sup>終了後の新しい生活のあり方や行動の移し方の術がつかめないこともあるため、地域に存在するさまざまな社会資源との橋渡しの役割の存在の有無とその広報活動の工夫が重要であると結論できる。また、グループ活動の参加状況では、男性の参加動機に関連するキーワードとして、「地域貢献」があげられる。男性は、地域貢献が具体的に示されやすい活動に参加する割合が高いと結論できる。次に、世代別にみる学習活動お

よびグループ活動の参加状況であるが、単純に生理的年齢でその人を判断するのではなく、個別の事情や状況に応じた関わり方や援助のあり方が重要であると結論できる。そして、家族内孤立の程度別にみる学習活動およびグループ活動の参加状況として、グループ活動では、家族内孤立の低群の高齢者の方が高群の高齢者よりも、地域貢献活動への参加割合が高く、その一方で不参加の割合が低いため、家族内孤立の高群の高齢者の方が低群の高齢者よりも地域との関係が希薄化しているものと結論できる。

次に、第二の結論として、男性は、グループ活動、特に健康やスポーツ、趣味に関する活動が精神的健康を高めている。すなわち、男性にとっては、主体的に参加することができる活動項目と、参加する頻度の比較的高い活動項目が自尊感情に関連性のある項目といえる。一方、女性は、学習活動を通して、自分を高めることが精神的健康につながると結論できる。次に、世代別では、誰もが気軽に参加できる社会資源を積極的に展開することが精神的健康を高めることになる結論できる。また、家族内孤立の程度別では、家族内孤立の程度が同じように高い場合でも、自尊感情を低下することを防ぐ要因として、学習活動の参加があげられると結論できる。

そして、第三の結論として、家族内孤立の程度が同じように高い場合でも、孤独感を低下させる要因として、友人の存在が有効であると結論できる。

最後に、第四の結論として、友人間のソーシャルサポート、特に物質的サポート、情緒的サポート、情動的サポートによる授受行為が満足できるものであれば、精神的健康の保持につながるといえる。これは、重要な他者である友人からの「愛情」や「信頼」が得られていることを証明しており、自己の存在意義、価値を獲得するものといえる。さらに、家族内孤立の程度が同じように高い場合でも、精神的健康の保持に、友人との信頼関係が有効であると結論でき

る。

今後の課題としては、まず第一に、本研究結果からも、家族内孤立の程度別を統制した上での分析に一定の意味があるといえるが、今回は、家族内孤立の高群のデータ数が少なかったため、詳細な分析が困難であったことも事実である。したがって、次回の調査では、家族内孤立の高群のデータを活用して安定した分析結果が得られるように、標本数を増やし、調査を行うことが必要である。

第二に、依然として、各種活動内容への不参加の割合が高いことから、今後は、参加動機や不参加理由の自由記述をふまえた上で、質問項目の精選を行い、次回の調査では、地域で生活する高齢者への実践的な援助のあり方、関わり方について、より詳細に検証することも今後の課題である。

#### 引用文献

- 1) 厚生労働白書(平成15年版) 2003 厚生労働省監修 ぎょうせい p. 37.
- 2) 安達正嗣 2003「高齢者の生きがいとしての家族・親族・地域関係の再構築」『生きがい研究(第9号)』長寿社会開発センター編 中央法規出版 p. 62.
- 3) 図説高齢者白書 2004年度版 2004「学習・教育」三浦文夫編著 全国社会福祉協議会 p. 86.
- 4) 高橋正人 1989「老人家族の変容」『看護研究』22(2) pp. 53-54.
- 5) 直井道子 2003「高齢者の生きがいと家族」『生きがい研究(第9号)』長寿社会開発センター編 中央法規出版 p. 38.
- 6) 山本真理子他 1994「自尊感情尺度」堀 洋道・山本真理子・松井 豊編『心理尺度ファイル-人間と社会を図る-』垣内出版 pp. 67-69.
- 7) 大和三重他 1990「日本の高齢者の自尊感情とその要因分析」『老年社会科学』12 p. 150.
- 8) 工藤 力他 1994「改訂版 UCLA 孤独感尺度」堀 洋道・山本真理子・松井 豊編『心理尺度ファイル-人間と社会を図る-』垣内出版 pp. 188-191.
- 9) 高齢社会白書(平成17年版) 2005「高齢化の状況」内閣府編 ぎょうせい pp. 42-43.
- 10) 野口裕二 1991「高齢者のソーシャルサポート:その概念と測定」『社会老年学』34 p. 41.
- 11) 河合千恵子他 1992「老年期におけるソーシャルサポートの授受:別居家族との関係の検討」『老年社会科学』14 p. 65.
- 12) 橋本有理子 2005「老年期における家族的役割、社会的役割と精神的健康との関連性に関する研究」『関西福祉科学大学紀要』9 p. 124.
- 13) 高野和良 2001「都市高齢社会と生きがい」金子 勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房 pp. 325-340.
- 14) 竹中星郎 2000「どのように老いを生きるか」竹中星郎著『高齢者の孤独と豊かさ』NHKブックス p. 195.
- 15) 金子 勇 2003「高齢者類型ごとの生きがいを求めて」『生きがい研究(第9号)』長寿社会開発センター編 中央法規出版 p. 10.
- 16) 藤崎宏子 2003「高齢期への移行と「生きがい」」『生きがい研究(第9号)』長寿社会開発センター編 中央法規出版 p. 46.
- 17) 前掲論文12) p. 123.

#### 参考文献

- 高野和良 2004「高齢社会における社会組織と生きがいの地域性」『生きがい研究(第10号)』長寿社会開発センター編 中央法規出版.
- 守永英輔 2004「高齢者の社会参加」『生きがい研究(第10号)』長寿社会開発センター編 中央法規出版.